

小金井は八王子に恋してる。
そんなまさか。

秋葉原にどんなイメージをお持ちだろうか。

日本最大の電気街、オタクの聖地。

対人恐怖症にとっては戦場だ。

「ぼくのキュアレモネード返してください!」

秋葉の路上でザクを壊され悲嘆に暮れる。

天を仰ぎ地にひれ伏し嘆く、ぼくを手に手に戦利品の紙袋を
さげたご同類の通行人が迷惑そうに避けていく。

秋葉原は本日も晴天盛況なり。

今まさに砂糖を飽和量ぎりぎりまで溶かしこんだアニメ声
で、「ご主人様、またのお越しをお待ちしてます」と送り
だされ、でれでれやにさがってメイド喫茶から出てきた肥
満オタクが、道のど真ん中で土下座するぼくを見るなりぎよつ
としそそくさ立ち去る。

誤解しないでほしいがぼくだって好きで道のど真ん中に這
い蹲ってるわけじゃない。断じてない。

ぼくは白昼堂々道のど真ん中に土下座して快感に痺れるよ
うな熱烈ドレイ志願じゃない、どこにでもある物欲が強く
妄想が激しいただのオタクだ。

地べたを這うありんこのように地味に生きてるんだ。

樹液をちびちびすすり露命を繋ぐカブトムシのように慎ま
しく生きるんだ。

もういいからそつとしといてくれ、漫画アニメが好きなら
だけで誰にも迷惑かけてないんだから。

空気のように無味無臭透明でありたいと常に心がけている
のに、出歩くつど報われた試しがない。

ほら、今も。

何の因果か、自分とは正反対の人種に理不尽きわまりない
吊るし上げくらつてる。

「キュアレモネードってなに。あ、ひよつとしてこのオニ
ンギョウの名前?」

「返してください!」

「お前知んねーのか、日曜の朝やつてる女の子向けアニメ
のキャラだよ。キメ台詞は弾けるレモンの香り」

「お前こそなんで知ってんだよキメエ、観てんのかよ?」
「チャンネル回したらまたま変身シーン出くわしたんだ
よ」

「だよな、この年になってしかも男がテレビにかじりつい
て美少女アニメ見たりしねえよな、想像しただけでキメエ
よ」

「弾けるレモンの香りとか意味不明だし」

恐怖で声が上擦る。足が萎縮する。のびした手が往復でむ

なしく空を払う。

すかつ、すかつ、そう擬音をつけたいほどの見事な空振り。運動神経の鈍さに軽く絶望する。

僕の手から取り上げたフィギュアを弄びつつ徒党を組む不良どもが笑う。

秋葉原には見るからに場違いな人種。

髪を薄汚い茶や金に染めピアスや指輪やチェーンのネックレスをちやらちやら光らせた若い連中。

…若いつていつてもほくと同年代だけど、思想価値観はファーストガンダムとW以降の萌え偏重ガンダムくらい隔たりがある。つまりは話を通じない。

なんで秋葉原にこんな場違いな人種が生息してるんだ。

オタクの聖地から追放したい。

キメエ、キメエ、紙に飽きたヤギさんのストライキさながら巻き舌で唄うように連発。

語彙が貧弱な連中め。日本人の基礎教養としてラノベくらい読めと言いたい。ちなみにぼくのおすすめはイリヤの空、UFOの空だ。あれは泣ける。

「なに顔真つ赤にしてオニギョウさん取り返そうとむきになってんの？ キメエよ、おまえ。いい年してズリネタがフィギュアかよ」

現実逃避強制終了。

現実、白昼の路上に叩き戻される。

目の前にはずらり下劣な顔がならぶ。

秋葉原よりは渋谷のがよっぽど似合いそうな若者たちがぼくの反応をにやにやうかがう。

渋谷に行こうとして間違えて秋葉原にきたんなら重度の方向音痴、山手線は慣れないうちは混乱するから乗降駅を間違える可能性はじゅうぶんある。

恥辱と悔しさに頬を染めて俯く。

下を向けば数年前から買い換えてない薄汚れたスニーカーとださいズボンの裾が目に入り、いつそう憂鬱に打ち沈む。なんでこんなことに？

思えば朝からツイてなかった。

月に一度の遠征日、アパートの部屋を出た時、隣の人とすれちがった。

お隣には若い夫婦が住んでいる。

「こんにちはあ」と挨拶してくる新婚妻を頭から遮蔽布引つ被った容疑者さながら俯き加減にやりすぎし足早に階段をおりた。

駅では改札のタイミングに乗り遅れ、券をとりそこね後が詰まった。

死にたかった。注目と失笑をあびるのは耐え難い。トラウマを挟られる。

なにせ駅なんて月一回しか使わない、おかげで今だに改札機が射出した券をとりはぐれる痛恨のミスをやらかす。

改札機の扉は無慈悲に閉まり内側に閉じ込められた。

駅員さんが飛んできてくれるまで後列の皆さんの迷惑げな舌打ちおよび白眼視を被った。

死にたい。

恥ずかしい。

うち帰りたい。

改札にひつかかる凡ミスやらかした時点でアパートに引き返したい衝動が限界値まで高まった。

そして現在。

目の前には意地悪くにたつく不良、足元にはザクのバラバラ死体。

しょっぱなから他人と接触する不運に見舞われたとはいえ、秋葉原に着いてからは順調だったのだ。

ラノベの新刊もフライングゲットしたし、ほしかったゲームも手に入れたし、キュアレモネードのフィギュアとザクも買えたし実際ほくほくだった。

どうしてこんな事になったんだ。

ただ道を歩いてただけなのに。

それはそう、袋に入りきらなかったから、ガンブラの箱右脇に、左脇にはキュアレモネードの箱抱えてちよつと目立つ

てたかもしれないけど。

秋葉原じゃ異彩を放つてほどじゃないし、ぼくよりキテレツなかつこをした人は沢山いる。

コスプレヤーだつて普通にそのへん歩いてるし、鬱陶しく前髪伸ばして、度の強いメガネをかけて、地味なシャツとズボンを羽織ったぼくなんかになんかわざわざ絡むような暇人がいるとはおもわなかった。

いたのだ、意外にも。

だからこんな面倒くさい展開になつてるわけで。

ああぼくのザク。

あなたたちはぼくのザクを壊しただけじゃ飽き足らずキュアレモネードまでも陵辱しようというのか。

なんという非道、なんという鬼畜。

天下の公道でこんな横暴が許されるのか。日本憲法の改正を求める。

国会で居眠りばかりしてる団塊世代の方々にオタク保護法の成立を急いでほしい。

「か、返してください。それ、ぼくが買ったんですよ。お金払って……」

もごもご、口の中でくぐもつて呟く。

キュアレモネード。

いまさら説明するまでもない、日本の女の子に健全な夢と

希望を、大きいお友達に不健全な夢と欲望を与え続ける国民的アニメのキヤラの一人。ぼくが現在夢中な女の子。

彼女がめあてでわざわざ八王子を遠く離れ秋葉原に足を運んだといつても過言じゃない。

「あー？ 聞こえないなあ、もつとはつきり言えよ」

「買った？ あんたが買ったの、こんな女の子向けのおもちゃを？ きめえ、変態かよ」

「おい見ろ、これちゃんとパンツはいてる。よくできてんなー、間接動くし」

汚い手でべたべたいじるな低脳ども、間接をむりやり動かすな壊すな。

抗議したいのをぐつと堪える。

不良たちは目新しいおもちゃの性能を試すようにフィギュアの手足を曲げて遊ぶ。

今すぐ野獣の手からぼくのヒロインを取り返したい。理不尽な略奪に怒りを覚え、口を開く。

「キユ、キュアレモネードは、プリキュア5の主要登場人物のひとり春日野うららの変身した姿で」

男たちが振り向く。

視線の圧力にたじろぐも、目を斜め四十五度にそらしへどもど続ける。

「キユ、キュアレモネードでコンプなんです。ほかは全員

集めたから……そのフィギュア、よくできてるでしょう。

高くて。レア物で。手に入れるの、すつごく苦労したんです。ほら、このスカートの翻り方。ツインテールの螺旋スパイラルな丸まり方。職人のこだわりを感じます。塗りも

むらがないし、全体的に均整とれてるし、すつごく完成度が高い。こんだけ塗りと細部の造形が完成度高いのに、美少女キヤラのフィギュアじゃめずらしいフルアクションフィ

ギュアなんです」

男たちが呆気にとられ、突如別の惑星の言語をしゃべりだしたような奇異なまなざしを向ける。

吃音で聞き取りにくい解説に次第に熱が入りゆく。

「ただ飾って楽しむんじゃなく色々動かして遊べるんです。美少女フィギュアは飾って見て楽しむんだ、アクション型

は邪道だっていう人もいるけど、ぼくはフルアクションも悪くないと思うんです。色々ポーズとらせることもできる

し、撮って楽しめるし、ブログにアップし放題だし。全種コンプすれば戦闘シーンだって華麗に再現できます。こま

ちとかれんに至っては待望の百合だって！」

饒舌にしゃべりながら興奮に駆られ勢いよく手を広げ、ずいどにじり寄る。

不良がやや引く。

「え、こいつなに言ってるの、日本語？」 「きよどんなよ」

「意味わかんね」「塗りはけ？ ついでにーる？」不良たちが戸惑う。

相手は三人、こつちは一人。多勢に無勢、まともにやりあつたら勝ち目がない。

周囲の助けは期待できない。なら自分でなんとかするしかない。

ファイギュアにかける情熱なら誰にも負けない自信がある。さあ、今こそ無駄に蓄えた知識量で圧倒するとき！

「しかもパンツ、パンツはいてるんですよちゃんと。その人、目のつけ所いいなつて感動しました」

「ニンギョウのパンツなんか興味ねえよ！」

「でも見ましたね？ 見ましたよね？」

不良がどん引く。

ここが正念場と一歩踏みこむ。

キュアレモネードをザクの二の舞にはさせないと強い決意を秘め、目に闘志を燃やし、体の脇でこぶしを握りこむ。

「たかがファイギュア、されどファイギュア。いやぼくにどつてはたかがなんかじゃない、現実の女の子にだつて勝る価値が」

衝撃、路上にすつ転ぶ。

足払いをくらう。

転倒のはずみに紙袋から大量の漫画とラノベがなだれ路上

に散乱する。

鼻梁にずりおちたメガネごしに不良たちを仰ぐ。

「ごちゃごちゃやるせえんだよ、ネクラオタク」

「返してほしかったら金だせよ」

唾と一緒に暴言を吐く。

不機嫌げに殺気立つ男たちを地面に手をつき見上げる。

道には他にたくさん人がいる。その全員が見て見ぬふりで通り過ぎていく。

我関さず、ぼくはここにいるのにここにいない。無視、無関心。

無視されるのは慣れてる。いまさら、だ。

これしきで胸は痛まない。

ぼくも多分、同じことをする。赤の他人が不良に囲まれてようが、関係ないと割り切つて無視する。恐喝の現場に首突つ込んでとぼつちりくうのは馬鹿のすることだ。

声優が歌うご機嫌なアニメソングが空々しく流れる。

メイド喫茶に出入りする客が、地面にへたりこむ僕と正面の男たちを露骨に見比べる。

色とりどりのポップ、耳から入り脳を攪拌するアニメソング、音と色の洪水。

二次元に魂売り渡した者どもが闊歩する軽薄で猥雑な街。

ぼくはここでもひとりぼっちだ。

秋葉原は、都会は、八王子を田舎者と侮辱する。

「……………」

「どしたー？ だんまりかー？」

「唇噛んで俯いて、泣いちやうかー？」

「ママンにいじめられたって泣きつくかー」

「ついでにお小遣いもらってこいよ、俺たちに恵んでくれよ」

男たちが調子にのって笑う。

立ち上がりしな、手荒く突き倒される。

再び倒れた僕を見て、男たちが爆笑する。

オタク狩り。恐喝。ネットニュースで見た事件が脳裏をぐるぐる回る。

まさか自分が巻き込まれるとは思ってもよらなかつた。よりにもよって月に一度の遠征日にでくわすなんて、運が悪すぎる。

催涙スプレーでも持つてくりやよかつた。……そもそも暴漢撃退用催涙スプレーを持ち歩く成人済みの男ってどうなんだよ、と女々しい発想におちこむ。

「……………帰りの電車賃しかありません。ほとんど使っちゃったし」

俯きがちに言えば男たちが豹変、一気に雰囲気が悪くなる。

「ああつ？」と粗暴な本性露に一喝、尻餅付いたほくの鼻先に不良座りでしゃがみこむ。

「んだよ、オタクって金持ちなんだろ。フィギュアとかすげー高いっていうじゃん。両手の袋一杯買い込んだら相当金もつてんだろ」

「だから使っちゃったんです……この、両手の袋の中身に」怖い。まともに目が見れない。口の中が乾く。心臓が早鳴る。

「嘘吐け。ほんとは持つてんだろ。騙そうたってそうはいくか」

「ほんとですって！」

ヒステリックに叫ぶ。

反抗的な態度が気に障ったらしく、一人が胸ぐらを掴み、ぼくを吊りさげる。

首が絞まって苦しい。動揺と生理的涙で視界がかすむ。

嫌々するように首振り訴えるぼくを無視し、仲間を顎をしゃくる。

意図を察した残りふたりが素早く後ろに回りこみ、服の上から体をまさぐりだす。

「！ ちよ、なにすひやうつ」

敏感な腋をくすぐられ不覚にも笑ってしまう。

ズボンの尻ポケットをまさぐった男が「あつた！」と歓声

を上げる。手には財布。

「あ！ やめ、返してください！」

「んだよ、ちゃんとあんじゃん。ひい、ふう、みい……」
収穫に口笛を吹く。

絶望で血の気が引く。

男が財布から紙幣を抜く。

犯罪の決定的瞬間を目撃し、ぼくは拘束を解こうと非力なりに諦め悪くじたばた暴れる。

胸ぐら掴まれもがくも貧弱運痴なぼくの抵抗など歯牙にもかけず、紙幣だけ取り出した財布を捨て、不良たちが高笑い。

「上限一万までなら出します、だからキュアレモネードは無傷で返してください！」

こんな時でも敬語を撤回できないヘタレな自分が恨めしい。哀願するほくに含みあげな視線を向け、何事か示し合つた男たちの一人が代表して前に出て、腕に抱いたキュアレモネードを無造作に振りかぶる。

「返して欲しいんだろ？ ほらよ」

「!!」

キュアレモネードが危ない。

案の定、僕が予測した通りの行動に出る。

男が腕を振り上げ、フィギュアを地面に叩き付ける構えを

見せー

咄嗟に体が動く。

地を蹴り、ぎりぎりまで腕をのばし、落下するフィギュアをすくう。

同時に奇跡がおきた。

僕は見た。

二次元美少女の等身大立て看板、その後ろから歩み出た影が、フィギュアをぶん投げ笑う不良の鳩尾に蹴りを放つ。不良が吹っ飛ぶ。残りふたりが憤激に駆られ同時にとびかかる。

影が迅速に動く。

拍手喝采したくなるような素晴らしい反射神経、瞬発力。

「いじめかつこワルイ」

飄々とした声で影が呟く。呟きながら同時にかかつてきた二人を軽くいなす。

首を竦め、肩を竦め、ヒップホップでも踊るように腰を回してパンチの軌道をそらし、足払いで転ばせる。

看板に頭から突っ込んで倒れこんだ二人目の背中を踏み付け、後ろ襟を掴んで引きずりおこし、鳩尾に鋭角のジャブ

を叩き込む。

喧嘩慣れした機敏な動作。

強い。

なんかもーばかみたいに強い。アニメやラノベ、二次元でしかお目にかかったことない痛快な強さだ。

「まだやる？」

「くそっ!!」

颯爽と白い歯を見せ挑発する男の反則な強さに恐れをなし、尻をさらすのをよしとせず、三人目が逃げ出す。

あつさり片が付いた。時間にして五分もかからなかった。

仲間を見捨て逃げた三人目は深追いせず、尻餅ついたほくに向き直す。

「だいじよぶ？ けがはない？」

「はい……」

呆然。

開いた口が塞がらない。

男に声をかけられ、痺れがとけた舌が本来の機能を回復する。

たどたどしく頷き、あたり一面に散らばった本やら漫画やらを這い蹲ってかき集める。

注目を浴びてるせいか、動きがやけにぎこちない。

羞恥で顔が熱い。

無力感と劣等感が塊となって喉を押し塞ぐ。

紙袋に本やら漫画やらを詰め込むほくの方へ、救世主が歩いてくる。

「あ、」

ありがとうございますと礼を言おうとした。

続けられなかった。

「ほら」

鼻先に紙幣を束ねて突き出される。

不良がぼくから取り上げた一万円札だ。

会釈して受け取ると同時に、初めてまともに救世主の顔を見る。そして二度びつくりする。

若い。年はぼくとそう変わらない。

悪ガキっぽい、人懐こい笑みが似合う快活そうな顔だち。

髪は茶色く染め無造作に散らしている。耳朶に黄金のピアス、首元にたれるシルバーのドッグプレート。ぼくに絡んできた不良とおなじくいかにも渋谷を歩いてそんな軽薄で

ナンパな雰囲気、自分が誰もに好かれると信じて疑わなかったたかな無邪気さ。

そこまで考え、他愛ない連想に不審と警戒心を抱く。

したたかで無邪気。

本来相容れぬ対極が結びついた悔りがたさ故か、本能的に苦手意識が働く。

喉元まで出かかった感謝の言葉がひっこむ。

「それ無事だった？ 腕とかとれてない？」

「だ、大丈夫です……」

それだと？ 失礼な、ぼくのキュアレモネードにむかって。

せめて彼女といえ。

若者らしく砕けた口ぶり、興味津々の目、陽性の雰囲気。

ぼくの苦手なタイプだ。クラスにいたら絶対敬遠する、ま
ず半径一メートル内に近寄らない。

不躰な視線を避け、身を挺し庇ったキュアレモネードを抱
いて俯く。

居心地悪い。なんだこいつ、ひとの顔じろじろ見て。さつ
さと帰ろう。

ラノベと漫画をあらかた紙袋に詰め終え立ち上がれば、名
前も知らない男がずいっと近付く。

「なんですか？」

「あんた童貞？」

「はあ!？」

ちよつと待て。なんだこの会話。

何かの聞き間違いないか。

よく考えれば初対面の相手に、いきなり童貞かなんて聞く
失礼なヤツいるはずない。

深呼吸で心を落ち着かせ、自制心を総動員し、馬鹿丁寧に

聞き返す。

「すいませんもう一回」

「童貞？」

前言撤回、こいつ失礼だ。

「どうて……つてなんですかいきなり!？」

「ごめん怒った？ じゃあ質問変えるわ。あんた独身？

ひとりぐらし？」

「そんなザクIだめならザクIIはどうかみたいな質問さ
れても」

付き合ってられない。

紙袋を持ち踵を返す。駅の方へ急ごうとして、後ろからい
きなり腋の下をまさぐられる。

「ひゃあつ!？」

腋にしのびこんだ手にくすぐられ膝が砕ける。紙袋が傾き、
一度詰め込んだ漫画が盛大になだれる。

「や、やめ、うは、あははははははは、そこ弱ッ、や、
ちよ……なにすんですか白昼堂々秋葉原の路上で警察呼び
ますよ!？」

「八王子東二十二歳、現住所八王子……八王子生まれの八

王子？ はは、ヘンな名前。名前はひがしって読むの？

あずまかな」

いつのまに。

悪びれず笑うそいつの手に見慣れた免許証入れ……ぼくのだ。慌ててズボンの上から探れば、ふくらみが消えている。

「返してください！」

「すごい偶然。俺、小金井っていうの。生まれも育ちも小金井の小金井リユウ。八王子在住の東ちゃんと相性よさぞ」

「それが人様の免許証抜き取って言う台詞ですか!？」

小金井リユウ、それが名前か。目の前の男は悪戯が成功したガキみたいにやんちゃに笑ってる。笑うと八重歯が目立つ。

「俺、行くところないんだよね。東ちゃんとここに泊めてほしいな、なんつって」

「はあ!? なんで!？」

「八王子と小金井のよしみじゃん。あと、お金取り戻してあげたつしよ」

意味不明。思考回路が理解できん。何コイツ。

噛み合わない話に脱力感さえ覚え始める。警察に行く、呼ぶ? どっちの選択肢が正解だ、ゲーム的のいうと分岐点だぞ。

困惑しきり、道行く人々に縋るようなまなざしを向けるも無視される。この男、正気?

「ふざけてないで返してください、それがないと困るんですよ、漫画喫茶の会員カード作れないし!」

躍りになって取り返そうと両手を突き出すも、小金井はぼくの軌道を片っ端から読み、免許証入れをスイスイ右から左へ、上から下へ斜めへと移動させ翻弄する。

のみならずちやつかり服の内側にしまいこみ、首を傾げておねだりしてみせる。

「これは預かつとくね。そういうわけで俺を泊めてよ。命の恩人の頼み、むげにできないっしよ」

「あんた何なんですか!!」

「ヒモ」

一発で人の心を掴む極上の笑顔。

断じて恋でも一目ぼれでもない。

ゆすりであつて脅迫であつて犯罪であつて最悪の出会いである。

八王子東、二十二歳。ニート。

今日この日よりぼくのアパートには一匹のヒモが転がり込むことになる。

MASTER \ タートル仙人さんが入室しました

MASTER▽ハルイチさんが入室しました

タートル仙人▽ばんわー。お、今日はハルイツちゃんと同
伴？

ハルイチ▽ばんわー。早いですねタートルさん、会社もう
終わったんですか？

タートル仙人▽ふっふっふよくぞ聞いてくれました、今日
は待ち望んでいたラノベ新刊の発売日だから仮病使って早
引けしてきたのだ！ もー嬉しくって嬉しくって帰宅する
なり靴下脱ぐのも惜しんでGETT報告に参上したわけよ

ハルイチ▽（うわあ……ダメ社会人……）タートルさんが
待ち望んでたラノベってひよっとしてあれですか、高梨ケ
イの

タートル仙人▽もえ☆まほ！ 深夜枠でアニメ化決定して
今のりにのつてる萌え萌え魔法少女バトルアクション最新
刊、作者が過労で倒れて半年お預けだったんだけどこのた
びアニメ化決定にあわせて新刊発売の決定とあいなりまし
たー！ パフパフ！

ハルイチ▽パフパフて（笑）テンション高いなあタートル
さんは。でも仕事いいんですか、たしかI▽関係でしょ？
タートル仙人▽パソコン持ったりやどこでも仕事できるの
がI▽関係のいいとこ

MASTER▽まりろんさんが入室しました

まりろん▽ばんわー。って、あれ、タートル仙人さんがい
る！ 嘘ッ、めずらしー

タートル仙人▽なんだよ来るなり人を生粋の深夜組みたい
に（笑）

まりろん▽ひよっとしてハルイチさんと同伴？ ふたりっ
きりでお見合い？ うわ、やーらしー。で、どっちが受け？
やっぱタートル仙人さんが強引攻めでハルイチさんが流さ
れ受け？

ハルイチ▽ちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが
うしてきみはすぐ腐った方向に話をもつてくの!?

まりろんVえーだつて私腐女子だしー男ふたりいたら攻めと受けの二択だつて遺伝子レベルですりこまれてるし。もうひよこの雌雄判別鑑定士なみの眼力で見分けちゃいますよ？ とところで今日いーちゃんは？ まだなの？ めずらしー

ハルイチVそーいやまだですね、いつも大抵いちばんのりなの

タートル仙人V菌ちゃんなら今日は月に一度の秋葉遠征だつて言つてたぞ。好きなフィギュア職人の新作発売とかで

ハルイチVあ、そーいやブログにも書いてありましたっけ
まりろんVいーちゃんよくやるよね、フィギュアつて高いのに。全種コンプめざしてるんでしょ？ 私もピンキーストリート集めてるけど。頭身低くて可愛いんだ、すきんだ心が癒される

タートル仙人V美少女フィギュアには夢と希望と愛と欲望が詰まってるからな。俺もアイマスやよいのフィギュアに

かけちゃちとうるさい。トカチツクチテー☆

ハルイチVブログ更新楽しみだなあ。製作過程いちからUPしてくれませよ、イーストさん凝り性だから。こないだのザクには感動したなあ

タートル仙人Vうむ、あれはまごうことなきザクだつた

まりろんVガンダムのお話わかんない、種以降にしてよー。私はアスキラより断然キラアスで

MASTERVイースト菌さんが入室しました

タートル仙人Vお、きたきた噂の彼が。月イチ秋葉遠征お疲れー。収穫はどうだった

ハルイチVこんばんはイーストさん。戦利品がっぽりですか？

まりろんVねえ聞いてよいーちゃん、タートル仙人さんとハルイチさんまりりんが来る前からチャットでしつぽりしてたの！ あやしくない？ あやししいよね？ 不潔ー

ハルイチ▽余計な事言わなくていいからまりろんちゃん！
それより秋葉原の話聞かせてくださいよ。おめあてのキユ
アレモネードはゲットできました？ イーストさんガンブ
ラに賭ける情熱はもちろんだけど美少女フィギュアに賭け
る情熱も負けず劣らずだから今度もカスタムし甲斐が

イースト菌▽ぼすけて

ハルイチ▽？

タートル仙人▽？

まりろん▽？

イースト菌▽たすけてくださいあ

タートル仙人▽どうしたんだいきなり、懐かしいネタを六
倍角で

まりろん▽メソ好きだったなー。あのもふもふ感たまらな
い。背中のジッパ―もいいよね意味深でミ中になに入ってる

のつて突っ込みを

ハルイチ▽てかほんとどうしたのイーストさん。テンショ
ン低いよ？ 速出して疲れてるのかな？ むりしてチャッ
トこなくても

イースト菌▽秋葉原の路上でとんでもないもの拾っちゃっ
たんです

まりろん▽？ 意味不明

タートル仙人▽美少女か、オチモノか？ ラノベの王道展
開だ。猫耳が付いたら完璧だ。秋葉原の路上にダンボー
ル箱に入れられていた猫耳美少女（もちろん裸）を拾った
時から恋が芽生える

ハルイチ▽ちよびっつですか

まりろん▽最初から話してくんなきゃわかんないって。拾っ
たつてなにを？

イースト菌▽変質者を

まりろん▽警察行かないや

タートル仙人▽待て落ち着け、ひとつ最初から菌ちゃんの話聞いて

イースト菌▽出かけこそトラブルあつたけど秋葉原着いてからは順調で、おめあてのフィギュアとガンプラとラノベも買えてほくほくで、あとは帰りの電車にのりこむだけだったのに……やっぱりぼくなんか外出しちやいけなかつたんだ、ぼくのようなネクラなひきこもりが一步外にでたら疲病神おぶつて帰ってくるのがオチなのに！

まりろん▽いやだから落ち着いてつて、いーちゃんの話支離滅裂で意味わかんないよ。はい深呼吸、ひっひっふーひっひっふー

タートル仙人▽それラマーズ法だぞまりろんちゃん、なに産むつもりだ

イースト菌▽途中までは順調だったんです……右手にキユアレモネード、左手にガンプラ、これぞ三位一体合体アク

エリオン一億と二千年前から恋してる。だけどいきなり頭の悪そうな不良に絡まれて、あれですか、今ネットで話題のオタク狩りです、見るからに渋谷にいそいな場違いな連中が襲つてきて、ぼくのザクを、ザクを!! けれどもレモネードだけは命にかえて死守しました!!

まりろん▽オタク狩り!? 大変だったねえ、どこもげがない(汗)?

ハルイチ▽あちやーオタク狩りですか。災難だ……秋葉も今変な連中増えて物騒ですよ。警察呼びましたか?

イースト菌▽あ、いや、オタク狩りは追っ払ってもらったんですけど、それからが問題で。免許証とられちゃつてまりろん▽オタク狩りにとられちゃつたの?

タートル仙人▽被害届しかあるまい

イースト菌▽ちがうちがいます、あー説明すると長くなるんだけどオタク狩りは関係なくてオタク狩りを追っ払つてくれた人がぼくから免許証スツて事もあろうに「行くあて

ないから泊めて☆」ってむりやり、ゆすりです恐喝です脅迫です、これって犯罪ですよね!? もー疫病神ですよんつとに、キュアレモネードとザクの死体抱えてこつちは文字通り手一杯なのに!!

まりろん▽ごめんいーちゃん、状況よくわかんない

タートル仙人▽質問していいか? その疫病神って可愛い? 身長¹⁴⁵オーバー¹⁵⁰アンダー胸囲はAAサイズだと俺的に理想

イースト菌▽推定¹⁷⁸センチ、男です

ハルイチ▽話を整理するとイーストさんは秋葉原でオタク狩りに出会うてそこを見知らぬ人に助けてもらって、したらその人に免許証をすられて同居を迫られると

まりろん▽運命の出会いー!?

タートル仙人▽なんだ男か。がっかりだ

イースト菌▽勝手にがっかりされても困ります、とりえず

勝手にぼくの部屋に居座ってるこの人なんとかしてください、どんだけ頼んでも出てってくれないんですよ! こっちは免許証とりあげられてるし、なに言っても「まあいいじゃん」ってしれつと笑ってるし、あーもーこんなことになるなんて外出なんてしなけりやよかつた八王子から出なけりやよかつたそうできつと八王子の結界出たから呪いが

まりろん▽八王子って八人のイケメン王子が高尾山の天狗封じるための結界張ってるんだよね? ロマンチックー

ハルイチ▽えーとぼくもよくわかんないですけどイーストさんは今秋葉原出会った見知らぬ人に免許証とりあげられた上に、「今晚泊めてよ」とかむり言われてるわけですね?

タートル仙人▽図々しいヤツだなあ

ハルイチ▽ぼくらじゃ手が余るから警察に

MASTER▽イースト菌さんが退室しました

まりろん▽……………あ、帰っちゃった

電源を切りノーパソの蓋を閉じる。

「だめだこの人たち役に立たない……」

頭を抱えその上に突つ伏す。

アパートに帰つたら真つ先にパソコンを点けるのはもう習慣だ。

見慣れた部屋の中は雑然と散らかってる。

壁は二次元美少女の等身大ポスターで埋め尽くされ畳には同じくヒロインの等身大抱き枕、テレビと接続済みのゲーム機のコードが複雑にうねりのたくりショート寸前蛸足配線の危険な状態で絡まる。

カーテンを閉め切つた部屋は換気をめつたにしないため埃っぽく空気がよどむ。

パステルカラーがいかにも安っぽいプラスチックテーブルは積ん読状態のラノベや漫画に埋もれ、文字通り足の踏み場もない惨状を呈す。

ようやく帰ってきたぼくの部屋、懐かしのアパート。しかし安息とはほど遠い。

秋葉原から約二時間かけ八王子に帰ってきた。

遠征の疲労と外出のストレスで心身ともに消耗しきつてる。キュアレモネードのカスタムは明日に回して、今日はこのまま布団にもぐりこみたい。

風呂に入るのもめんどくさい。

一応アパートには小さな風呂が付いてるけど、殆どシャワーで済ましている。

二・三日シャワーを浴びず過ごすのもざらだ。

どうせ外に出かけ人に会う用事もないのでから身嗜みを気遣う必要もない。

ぼくなんかシャワーを浴びようが浴びまいが変わらないと卑下する気持ちは否定しないけど。

「どうしてこんなことになったんだ」

冷静に、落ち着いて、今日起きた事を順に思い出す。

アパートを出るなり隣の人をすれちがって挨拶され逃げるように階段をおりて、駅では改札にひつかかって白眼視を被つて、久しぶりに乗る京王線は混んでいて、新宿駅まで吊り革に掴まりっぱなしだった。電車が揺れるたび隣の人と肩がぶつかりあうのが耐え難かつたけど我慢した。

ぼくが猫背におぶつたりユツクをジャマつけに見ては舌打ちしまわりの人は露骨に迷惑がっていた。

ごめんなさい。申し訳ありません。

けれどもしかたがないんです、これがなきや戦利品持ち帰れないから。

秋葉原遊軍の際はラノベやら漫画やら買ったため両手が紙袋でふさがりユツクは必需品なんです。しかもこれクツションにもなるんですよ？ 中にフィギュアを入れれ

ばまかり間違つて転んでもリユックが緩衝材の役目を果たして無事だし、すごく便利。というか、だつたら最初からガンブラとファイギュアをいれとけよつて今思つたよね？

思つたでしょ？ ご意見ごもつとも。だけどこっちにもわけがあつて、ぼくが秋葉原をちんたら歩いてた時点ですでにリユックの中には春麗がおさまつてたのだ。リユックの中でキュアレモネードと春麗が火花を散らすのは心が痛む。やめて、ぼくのために喧嘩しないで。

ならばぼくとしてはどちらか片方を腕に抱いてのし歩くのになんら異存はない。

それで多少注目を浴びることになると、目立つて不良に絡まれることになろうとも、キュアレモネードと春麗がぼくをめぐる争奪の火花を散らす胸が痛む光景は見たくない。

まあそれはいい、それはいいのだ。結果としてキュアレモネードの貞操は死守できた。

運動神経ゼロの割には見事なぼくのスライディングが功を奏し、間一髪キュアレモネードを救えた。リユックの中の春麗も無事。ザクは……冥福を祈る。

問題は秋葉原の路上で余計なものまで拾つてきてしまったことだ。

「いや、憑かれたつてほうが正確か……？」

対処に困つて気心知れたチャット仲間相談したけどむだだった。

ぼくがよく行くチャットはもともと同じゲームが好きな仲間が集まるコミュから派生し、アニメ・漫画・ラノベ・フィギュア・食玩に至るまでサブカル系を網羅する情報交換が活発に行われている。

ハルイチさん、タートルルルさん、まりろんちゃん。

ぼくが知ってるのはハンドルネームだけ、みんなの本名さえ知らない。けれども現実の人間よりずっと、ずっと心を許せる。顔が見えないからこそ安心感がある。顔が見えない相手になら素の自分をさらけだせる。

困つた時のパソコン頼み。ネット依存の悪癖は自覚してるけどリア友がいらないとなると他に頼る先がない。

「ヤフー知恵袋にトピ立てて……教えて○○のがいいかな？ 掲示板にもスレ立てて……なんて書きこめばいいんだ、ひきこもりオタクが秋葉原の路上でヒモと出会つたなんてウルルン調に、いやそれ滑るつて絶対、自重自重。あーこの奇怪な状況なんて説明したらいいんだよーホントに、正真正銘今日出会つたばつかの赤の他人自称ヒモが電車の中はおろかアパートまでずっとついてきて、いくあてないから泊めてつて説得力なさすぎだろ！」

おねだりしてきたのが上半身にぶかぶかワイシャツ一枚の

美少女だったら嬉しいかも……じゃなくて。テーブル横、いつでも手の届く範囲にいた携帯をひねくりまわし悶々と悩む。

「警察、生活相談センター、あなたのお悩み聞きます人生相談……無難に警察？ いやでも警察って」

仮にだ、声から成人済みの男と一発でわかる人間が「オタク狩りから助けてくれた見知らぬ男の人に免許証とりあげられて、いくあてないから泊めてくれて追られる」と恥をかき捨て電話したとしても取り合ってくれるか？ もしほくが田舎から出てきたばつかの中央線と山手線の区別もつかぬ純情素朴な女の子ならまだしも、男だ。

女の腐ったようなと頭につこうが、性別が男で成人済みであるのに変わりないわけで。

「二十二にもなる男が免許証とり上げられて、言いなりでアパートまで連れてくるって……」

情けないの極み。

ぼくにだってプライドがある、あるともさ。オタクをなめるな。

警察がまともにとりあってくれる保証もない現状で通報するのはためらわれる。

仮にまともに取り合ってくれたとして、秋葉原の路上でオタク狩りにあって、恩人Ⅱ赤の他人にあつまり免許証とり

あげられてアパートまで連れてきちゃったなんて、恥ずかしくていえるもんか。むりむりむり、絶対むり。絶対笑われるにきまつてる、こうなつた経緯を舌を噛み噛みどもりがちに説明する様を考えただけで顔から火が出る。

卑屈なくせに自意識過剰、歪んだコンプレックスとプライド持ちなぼくとしては、警察を頼るのは……

「うわ、すつげえ、部屋きつたねー。壁にべたべたポスター貼ってある、女の子ばつか。グラビアアイドルとかねえの？」

「!!」

突っ伏したノーパソからがばり跳ね起き、振り向く。

「勝手に上がりこまないでください！」

「えー。だつてついてきちゃったし」

どうにも憎めぬ愛嬌滲み出るやんちゃな笑顔。声を荒げ制すもむなしく、小金井は靴を脱ぎ勝手に部屋に上がりこむ。「じやましーす」と一応断りをいれるにはいれたが、本当にじやまだ。

「ちよ、待」

慌てて腰を浮かす。

小金井は興味津津目を輝かせ、小手をかざして部屋の中を見回す。

アニメのポスターがべたべた貼りまくられ漫画とラノベが堆積し床ではコードが波打ち渦巻くカオスの惨状を物珍し

げに見回し口笛を吹く。

「すっげー、アニメと漫画関連ばっか。東ちゃん、もっさい外見を裏切らず相当気合入ったオタクだね」

「もっさい……」

暴言に軽くショックを受ける。

容姿コンプレックスをもつぼくの胸に今の発言は鉄の如く刺さる。

まあ確かにぼくはもっさい。それは認めよう。

染めたことない前髪を鬱陶しく伸ばし、度の強い分厚い眼鏡をかけ、センスを度外視した地味なシャツとズボンを着ている。

地味でネクラで内気で引つ込み思案、あらゆるマイナスイメージをかき集めグツグツ煮こんで出来上がるのがぼく、八王子東だ。

だからつて知り合つたばかりの素性も知らぬ男にもさいだのさいだの好き放題言わせとくのは我慢ならない。

ここ、ぼくの部屋だぞ？

脱力ですれた太枠黒縁メガネを押し上げ、部屋の中を口笛まじりに歩き回る無礼者に抗議する。

「ひとの部屋のりこんでもっさいとはなんですか、たしかにもっさいですよぼくはその点は否定しませんが、でも本人の前で言うつてどうですか、陰口なら譲歩します、見て見

ぬふり聞かぬふりは得意です、けどあなたドア開けて靴脱いで入ってきた途端に挨拶がわりに言いましたねもっさいで、ひとが気にしていることを……」

「ねーねーなにこれー？」

聞いちゃない。徹頭徹尾マイペースだ。

小金井がソフトの山から掘り出したパツケージを見て、一気に顔に血が上る。

「『ロリロリ妹大作戦☆おにいちゃん抱いて抱いてミルキーツインシスターズ』……」

「さわらないでください!!」

ヒステリックに叫び走り出すも、床で纏れたコードにひっかかって勢い良く転ぶ。

「東ちゃん、この子小学生だよね」

「18歳以上つてことになってます!!」

一応建前ではそういうことになっている。大人つて汚い。部屋に人をいれるのを想定しなかつたせいでやりかけのエロゲがあちこちに転がってる。

小金井は建前上十八歳以上の女の子が描かれたソフトパツケージを見つめる。

「東ちゃんこういうのでオナニーしてんの」

「おなっ……!!」

破廉恥な発言に耳朶まで熱くなる。小金井はソフトをいじ

くりつつ含みありげな流し目でからかう。

「小さい子見ると興奮すんの？」

「ぼくは二次元にしか興奮しない体質です!! 勝手にさわらないでください、泥棒……」

「あ」

気まぐれに立ち上がりしなほいとソフトを放り出す。

小金井が投げ捨てたソフトを倒れこみ寸手でキャッチ、胸までおろす暇もなく次なる不安が襲う。

「すっげー、プラモだ! たくさんある!」

能天気な歓声に凍り付く。特大級のいやな予感にぎくしゃく振り返り、衝撃的な光景を目撃する。

小金井が浮き浮きした足取りで柵に歩み寄り、新しいおもちゃを手に入れた子供さながら顔を輝かせ、ぼくが制作した命の次の次くらいに大切なガンプラをひよいと無造作に抱き上げる。

「ぼくのザクから離れる!」

怒りに駆られ床を蹴って駆け出す。

小金井は無造作な手付きでザクを縦にして横にして斜めにして高い高い、腕や足を曲げて遊んでいる。

「へー、ちゃんと動くんだ。すっげえ。これせんぶ東ちゃんなが作ったの? 器用。ガンダム、俺もガキのころ見てたなあ」

ガンプラをためつすがめつなれなれしく笑う。ああ、手垢がつく。

「早く元に戻して壊れちゃうから、それは持つて遊ぶものじゃないんです乱暴したら腕もげちゃう、ぶつかつたら大変……」

小金井に弄ばれるザクをはらはら見守る。

小金井がザクを掲げるたび落下に備え腕を出し、下降の動作に釣られ腕を引っ込め、バターになりそうな勢いでぐるぐるぐるぐる円を描く。

「色キレイだなあ。これ、ザクっていうの? 秋葉でもぼくのザク返してーって叫んでたよね。すっげえでかい声でびびった」

小金井が軽やかに笑いつつザクをつつく。

小金井の手からザクを奪還しようと右往左往するうち、むらなく明るい茶色に染まった髪や適度に日焼けした肌や悪戯っぽく稚気閃く目や白い歯こぼす健全な笑顔を間近に見て苛立つ。

そもそも部屋に他人をいれるなんて初めてだ。

小金井は屈託ない。

なれなれしいを通り越し凶々しい態度は業腹だが、持ち前の陽気な愛嬌のせいではない怒る気になれない。だが物事には限度がある。

面食いの女性ならまだしも、ぼくは人一倍警戒心が強くひきこもりがちなオタクだ。

自分の聖域をあらされるのは我慢ならない。

「いい加減にしてください、勝手にアパートまでついてきて……免許証も返してくれないし、ほんと警察呼びますよ!」

「えー。だっておれ行くとこないし、東ちゃん助けたのもなにかの縁つしよ。一日くらいいいじゃん」

ぼくだつて帰途なにもせずじつとしてたわけじゃない、図々しいヒモを追い払おうと努力したのだ。

しかしながら電車の端から端まで往復で歩き通しても小金井はカルガモの如くついてくる、扉が開くと同時に駆け出し又隣の車両に乗り換えても追ってくる。堂々巡りの追いかけてこで体力は底を尽き、八王子駅に着くころにはもうどうにでもなれとヤケになっていた。

「なんでぼくなんですか、関係ないのに……」

「オタク狩りから助けてやったのだから」

「ありがとうございます。消えてください」

「感謝してないっしょ、それ」

「ゴーホーム」

「ガイジンさんじゃないんだから英語で言い直さなくていいよ」

「ハウス」

「犬じゃねえし」

だめだ、話聞いてくれない。

すさまじい徒労感が押し寄せ絶望に膝をつく。今日は厄日か? ツイてない。

「わかりました、免許証だけでも……」

ため息まじりに妥協案を申し述べるも、忽然と小金井が消える。

「!?!」

音速で振り向く。

今度はなんだ?

鼻梁にずりおちたブリッジを中指で注意深く押し上げ、小金井の残像を追って目を細める。

小金井が、ひとのパソコンを勝手に覗いていた。

「すつげー、パソコンがあるー。見ちゃえ」

軽薄に口笛吹き、電源を入れ蓋を開ければ、青白い光を放ち初期画面が立ち上がる。

「—————っつ、

人のパソコン勝手に!?!」

小金井がテーブルの前に胡坐をかきマウスをクリック、液晶をのぞきこむ。

カーソルをお気に入りの一番上に移動させ軽快にクリック、意外に慣れた手さばきでブログを表示する。

「なになに、『イースト菌のフィギュア工房』フィギュアとガンプラ大好きなぼくが製作過程をUPする』……………」
 ぼくの趣味のブログ。

「いやあああああああああああああああああああああああ
 あああつ!」

処女のような悲鳴をあげ猛突進、ノーパソの蓋を力一杯叩き閉じ電源を切る。

テーブルに後ろ手付き背中でノーパソ庇えば、ぼくの剣幕にびびった小金井がしきりと目をしばたたく。

「えー減るもんじゃなしもつと見せてよ、ケチ」

「ひとのパソコン勝手に、しかもひとのブログ、なつ、あ、あんたなに、なに考えてんですか!？」

憤激の発作に駆られ、不服げに口を尖らす小金井の胸に震えるひとさし指を突き付け糾弾する。

「玄関に靴散らかすし勝手に手がかりこむしエロゲあさるしガンプラに汚い手でべたべたさわるし、あなた最低です!!
 ガンプラさわる前に手を洗うこれ常識、じゃないと黴菌と手垢が付く、ぼくが手塩にかけ作り上げたガンプラに外の菌もちこんだばつちい手でさわらないでくださいよ!」

「汚くないって。ほら、キレイ」

小金井がぶざけてかざす手のひらを邪険に振り払い、吠える。

「だいたいヒモってなんですか職業ですか、ヒモならヒモらしく女の人カモにしてください」

「韻踏んでるね」

「話そらさない。なんだって見ず知らずの男んちに転がりこむんですか、控えめにいつて大迷惑です。ぼく関係ないじゃないですか、たまたま秋葉原で出会っただけで八王子くんだりまでついてきて……………」

「せっかく八王子くんだりまできたんだから追い出さないですよ」

「くんだりって言うな! 謝れ、全八王子市民に謝れ! 小金井でもどこでも自分の家帰ってください!!」

曖昧な態度をとったのがいけなかった。免許証とられた時点で、否、最悪でも駅に着いた時点で断固たる態度をとるべきだったんだ。

人見知りから来る優柔不断な弱腰外交がこの常識知らずな男をつけあがらせたんだ。

もう完全にキレた。

勝手にひとのアパート上がりこんでエロゲあさってガンプラいじってブログ覗いて、こんな失礼なヤツと同じ空気吸うなんて耐えられない。

即刻お引取り願おうそうしよう全力で追い出しにかかろうと心に決め、涼しい顔の小金井に食いさがる。

「オタク狩りから助けてもらったのはホントだけど今日知り合ったばかりの人を家に泊めるなんて」

「財布とられてたら東ちゃん八王子まで帰れなかったよー？」

秋葉原から歩いて帰るはめになったよ？」

「ちゃん付けよしてくださいなれなれしい。まあ、感謝してますよそれは。それだけは。あなた……小金井さんが財布取り返してくれなかったらアパート帰れなかったし」

「あ、初めて名前呼んでくれた」

小金井がくすぐったげに笑う。本当に嬉しそうな顔に舌鋒が鈍る。

名前呼ばれて何がそんなに嬉しいんだよ？

ヘンなヤツ。深呼吸で落ち着きを取り戻し、小金井と向き合つてきちんと正座する。

ぼくに感化されたか、小金井も弛緩した顔を若干引き締め真面目くさつて姿勢を正す。

「第一意味不明です。いくあてないって、家はどうしたんですか」

「追い出された」

「はい？」

「付き合ってた彼女に。アパート、一緒に住んでたんだけどさ。働かずにごろごろしてたらこの甲斐性なしって蹴りだされて」

「はい？」

「浮気もばれて」

「はあ」

「で、あてもなく秋葉原ぶらついてたら偶然東ちゃんと出会つて。運命感じた」

「……どうしよう、今の会話だけで突っ込むところがありすぎてどこから正したもののやら」

運命感じただのなんだのこの状況で言われてもお世辞と丸分かりでまったく嬉しくない、どころかしよっぱい。同性に、しかも生身に口説かれたってなあ。

「……小金井さん、『運命感じた』の使用法まちがえてますよ……」

早い話、カモを物色してたらまたまたオタク狩りの現場に出くわしていかにも気弱で人がよさそうなぼくに目をつけたと。

こっちは恩があるしむげにできない。

おまけに免許証は相手の懐。

何回か取り返そうと試みたが、小金井の反射神経は素晴らしく、隙を突くという行為自体が土台不可能だった。

「困ってるんだよね、今。行くところねえし」

「友達とかいないんですか？」

自分の事は柵に上げ邪険に聞く。

小金井が頭をかきかき、「それがさあ」と首をうなだれる。

「いないのよ。金借りまくったら縁切られて」
だめだこの人。本格的に。

「じゃあ女の人テキストにナンパしたらいいじゃないですか。小金井さんなら楽勝でしょ」

自然、言い方もぞんざいでなげやりになる。

生理的に苦手だ、こういうタイプは……ぼくの場合苦手じゃない生身の人間の方が少ないが。

小金井はイヤミを褒め言葉と曲解したか照れくさげに頭をかく。

話を聞いた限りだとぼくとは別ベクトルの社会不適合者っぽい、ルックスは悪くない。というか、良い。

顔だちがどうこうよりも服やアクセサリーのセンスがいい。イマドキ風の見ただけど人好きのする人懐こい笑顔は好感度抜群で、母性本能くすぐると評せなくもない。耳朶にはピアス、首にはシルバーのドッグプレート。髑髏を染め抜いた黒地の「シヤツ」と膝が抜けたジーパンをスタイリッシュに崩して着こなす。

渋谷のライブハウスならしつくりくるんだらうけど、八王子いわんや秋葉原じゃ大いに場違いな人種だ。

「なんでぼくなんか……」
またため息。

小金井がすかさず持ち上げる。

「東ちゃん、優しそうだから。困ってる人をほっとけないオーラでてるっぽいし」

「仮定形で話されても困ります」

「えーと、じゃあ言いかえる。街頭のティッシュ配りやらキヤッチセールス絶対無視して素通りできないタイプ」
大当たりだよ畜生。

本性見抜かれた居心地悪さを帳消しにするように小金井は屈託なく笑い、律儀に手を合わせ懇願する。

「一日だけ、少しの間だけでいいんだ。な、頼む。お願いこの通り」

「見ず知らずの他人をアパートに泊めたくないです」

「見ず知らずじゃないよ、お互い名乗りあつたし。俺小金井、東ちゃん八王子。な、市も近いでしょ。殆どお隣さんでしょ」

「どうしても出でてくれないなら警察呼びます。免許証の件だって立派に盗難ですよ」

脅しも兼ねてアドレス入力した携帯を耳に添えた瞬間

「……………キュアレモネード守ってあげたでしょ」

それまでの弛緩した笑顔から一変、口元は笑みの形のまま、

目に油断ならぬ光を湛えた小金井が低い声で呟く。

おもむろにぼくの手首を掴み、携帯を耳から引き剥がす。

「俺、キュアレモネードの恩人だよ。それでしょ。東ちゃん
のキュアレモネードが五体満足で帰ってきたのだからのお
かげかな」

顔は笑ってる。威圧をこめた微笑。手首に指が食い込む。
握力の強さにたじろぐ。

息を呑むほくりにじり寄り、静かに抑圧した声の底に、脅
迫に似て剣呑な気配を滲ませる。

「部屋あらしたことは謝る。謝るから、追い出さないで。
ここに置いてよ。警察とかやめてよ」

「警察に知られると……まずいことでもあるんですか」
掴んだ時とおなじあつけなさで手が離れていく。

「ナイシヨ」

掴まれた手首が痛い。小金井は力が強い。喧嘩も強い。

秋葉原の路上で不良三人をあつというまに撃退してみせた
痛快の一言に尽きる活躍ぶりはまざまざ目に焼き付いてる。

「……………」

ちらかった部屋の中、こいつとふたりつきり。

相手が突如豹変し暴力をふるってきたらぼくはどうしよう
もない。

そもそもなんでそんな危険なヤツ部屋に上げちゃうんだよ

鍵かけとけよと間抜けな自分を呪ってみても後の祭りだ。
ぼくの対応次第で小金井がキレて暴れださないとも限らな
い。

一瞬見せた真剣な目、暴力さえ厭わぬ底暗い凄みを帯びた
笑みは、手首を掴んだ警力より何より効果的にぼくを制圧
する。

警察に知らせる？ いや、もし今度通報の素振りしたら
小金井の逆鱗にふれかねない。最悪携帯を壊されるおそれ
がある。

悩みに悩みぬいた末、決して目を合わせぬよう斜め四十五
度に視線をそらし妥協案を提示する。

「わかりました、押入れて寝てください」

「ドラえもん？ ドラえもんだよ？」

「じゃあ廊下で手を打ちましょう」

「ていよく追い出そうとしてるよね？」

「ばかそうに見えてばかりじゃないんですね」

作戦失敗。ますます状況が悪化していく。

鬱々と頭を抱え込みノーパーソの上に突っ伏せば、背後に忍
び寄った小金井が、薄気味悪い猫なで声でご機嫌とりがて
ら小指を立てる。

「迷惑かけないからさ。ね？ 東ちゃんがやだつていうな
らプラモにさわらないつて約束する。キュアレモネードに

もイタズラしないから」

「当たり前です」

「指きりげんまん嘘吐いたらシンナー飲ます。転がりこむ先決まつたら即出てくから……秋葉の路上で俺と会ったのが運の尽きだって諦めてよ」

嫌がるぼくの肩を気軽に叩き、むりやり手をとって小指を絡めてくる。

……まさかこの年になって、それも男と指きりげんまんするはめになるとは思わなかった。

絡めた小指を振る小金井は実に楽しんで宿泊大乗り気で、この距離なら懐から免許証とれるかダメだ小金井の反射神経は化け物だ、警察に来てもらおうにもどう説明していいかわからない、そもそも人見知りの対人恐怖症で奥手で口下手でニートでオタクというだけで頭の固い警察は偏見と先入観こりかたまって白眼視するに決まっついて、携帯介してだろうがまともに話す自信なんてこれっぽっちもない。小金井が財布を取り返してくれたのは事実なワケで。

「……………一日だけなら」

ぼくが無事八王子のアパートに生還できたのは、小金井がいたからで。

我ながら救いたいお人よしだと思う。

おもうけど、じゃあ他にどうしたらいい？ 断ったところ

で相手が免許証を盾に強引に居座るつもりなら、しかたないじゃないか。

一日とせめて期限を設けることで自発的な譲歩をアピールし、辛うじてプライドを支える。

ぼくがそう言い出すのを待っていたように小金井がはやりたち、力をこめ背を叩く。

「そうこなくっちゃ！ 話が分かるね、東ちゃん」

「ちゃん付けやめてください」

「俺の事はリュウって呼んでよ」

「叩かないでください小金井さん」

意地でも名前でなんか呼んでやるか。

とりあえず今日はチャットどころじゃない。

突然増えた居候に煩わされブログ更新も断念し、長々とため息を吐く。

本当の悲劇はその夜待ち構えていた。

『いい年してこんなガツコに持つてくん、きめえんだよネクラオタク』

あつけなく紐がちぎれキーホルダーが離れていく。

『あ』

伸ばした手が目測を誤りすかつと空を切る。

『どうした？ 大事な物なんだから、取り返してみろよ』
すかつ、すかつ。前のめりにたたらを踏み振り回す腕に合
わせ見事な空振りが続く。

顔の上半分は臍にぼやけ、下半分に切り込みのような嘲笑
を浮かべたクラスメイトがひとから奪ったキーホルダーを
掲げねちっこくからかえば、挑発に乗じ体が勝手に動く。
怒りと恥ずかしさが緋い交ぜとなつた感情に駆り立てられ
めちやくちやに手を振るうもクラスメイトの動きは素早く、
キーホルダーを追つて右に左に回した手は残像を掠めるだ
けで片っ端から封じられる。
涙腺が開き涙が滲む。

悔し涙なのか何なのか自分でもよくわからない。

『あはは、がんばれよ東ー』

『もうやめてあげなよ。八王子くん涙目だよ、泣いちゃ
うかも』

『面白いから好きにやらせとけよ、学校にアニメキャラの
キーホルダーなんか持つてくるのが悪いんだよ』

『授業に関係ない不要物の持ち込み禁止つて生徒手帳にも
書いてあるだろ』

『校則破つたんなら没収されてもしかたないべ』

『だよ。中学生にもなつてアニメのグッズ学校にもつて
くるとか超きもいし』

陰口つてのはもつと目立たずたたくもんだ。

幼稚な優越感に酔つた笑い声が教室に波紋を広げる。

どんくさいぼくに同情する女子、下品に膝を叩いて爆笑す
る男子。

くりかえし振りぬく手の滑稽な踊りが失笑を誘い、輪を作つ
たクラスメイトが盛大に野次る。

間合いに踏み込んだぼくの手からキーホルダーを縦横斜め
に遠ざげステツプ軽く翻弄し、リーダー格の男子がはやす。

『なんだよ、遊んでのか。ぜんぜん届かねーじゃん。もちつ
と本気だせよ』

『むりむり、東どんくせえもん』

『今日の体育だつて一番後ろ走つてたじゃん』

『はははつ、顔真っ赤にしてむきになつちやつてかつちよ
わりー』

疎外感。孤独感。劣等感。屈辱感。

ストレスで胃酸が分泌され酸っぱいものが喉に込み上げる。
床に手足を付き這い蹲るぼくを取り囲む個性を剥ぎ取られ
た顔の群れ。

ひとりひとりの目鼻立ちは漠然として個人識別は困難だ。

夢のフィルターを通して見る彼らの顔は、プラスチックの
お面みたいに妙にのっぺりした感触を与え、同じ鑄型で量
産したような印象が無個性な不気味さを引き立てる。

『か、返して！』

どもりがちに叫ぶ。

『か、かえして！ かえして！』

没個性な集団が笑いさざめき、語尾を上げ口真似をする。

『今の聞いた？ か、かえして！ だつてさ。嘯まずにしゃべれないのかよ』

『国語の音読も嘯みまくりなんだぜ、コイツ』

『一回くらいつつかからずまともにしゃべってみろよ、それができたら返してやつから』

『あんまりすぎるとまたガツコこなくなるよ』

顔のない女子がやる気ないあいの手をはさむ。

クラスメイトの手からキーホルダーを取り返そうと躍起になつて詰め寄る膝裏に蹴りが入りがくと姿勢が落ち、無防備に晒した背中を上履きの靴裏が直撃する。

背中に走る衝撃、痛み。

それらを悠長に感じるいとまもなく顔面から倒れこむ。

運動神経が鈍いからろくに受身もとれず、しこたま鼻っ柱を打つ。

『あははっ、転んじやつた！』

『カワイソー背中に靴跡ついちゃってる』

『山田、お前の上履ききつたねえなあ。おまけに臭えし』

『半年醸成した上履きだ。匂いだけで人が殺せるぞ』

立て。

頭が指令をとばす。目が霞む。

転倒のはずみに眼鏡をおっこした。おどおどろろたえきつて、床を手探り眼鏡を求む。

レンズの固い質感にほつとした次の瞬間、上履きでおもいきり手の甲を踏みにじられ激痛に呻く。

陰湿に渦巻く笑い声が三半規管に音叉の如く共鳴する。

同じ制服で顔は空白、狂気のピエロさながら耳まで切り裂かれた歪な笑いを浮かべるクラスメイトが重圧をかけてくる。

『それ、ぼくの……返して、ください、キーホルダー……』
同級生に敬語で懇願する。

擦り傷だらけの顔を痛みにしかめ言え、諦め悪いぼくに鼻白む気配が漂う。

キーホルダーをちらつかせつつクラスメイトが意地悪く言う。

『そんなにこれが大事か？ こんなちやちいキーホルダーが？ 意味わかんねえ』

『いい加減アニメなんか卒業しろよ』

『アニメのキーホルダーなんてつけてガツコくるのお前だけだぜ』

握り締めた手ごと踏みにじられ眼鏡のフレームがひしゃげ

る。

制服のシャツとズボンのあちこちに上履きで蹴られた跡が付く。

好きなものは好きなんだからしようがないだろ。

そう言えたらどれだけいいか。

あの時、ぼくにもう少しだけ胸があればなにか変わっていただろうか。

好きな物を守り通すことができたらなにかが変わっていただろうか。

今でも思う。くりかえし思う。

あの時のぼくにほんの少しの勇気があれば

『返してほしかったらおねがいしろよ』

『お願い……します、返してください』

『誠意が足んねー。お願いするときは土下座だろ』

外野から土下座コールが巻き起こる。

調子に乗ったクラスメイトの手拍子と口笛とが熱でジンと痺れた頭を席卷する。

視線はクラスメイトの手の中、さつきまで鞆にぶらさがっていたアニメキャラの三頭身キーホルダーに釘付けだ。

諦める。頭の片隅で理性が囁く。

たかがキーホルダーじゃないか、また買えばいい。

そこまですることない、土下座する必要なんかない。

土下座コールに乗せ外野の期待がふくらむ。

唇を噛み付き、震える手を握りこむ。

『どうすんだよ?』

心理的葛藤に付け込みクラスメイトが握り拳に力をこめ、キーホルダーが不吉に軋む。

キーホルダーと目が合う。

助けてくれと言われた気がした。

だからぼくは

『うわ、コイツほんとに土下座したよ!』

『マジ引くわー』

『こんな安物のために本気で土下座するかよ、頭おつかしいんじゃねえの』

床に手を付き。這い蹲り。全身で、返してくれと訴える。

顔が熱い。耳朶も熱い。情けなくて恥ずかしくて悔しくて腹が立つて、でもこうするしかないじゃないかと無理矢理自分を納得させる。

『わかったよ、返してやるよ』

『!』

迂闊に顔を上げたぼくの目の前を、ひゅんと残像を引き、腕がよぎる。

間に合わなかった。

叫ぶ暇さえ与えられなかった。

キーホルダーが放物線を描き、跳ね起きた頭上を飛び越える。そのまま開いた窓の外へ落下していく。

床を蹴り、窓枠にとびつき、はるか下をのぞきこむ。

窓からなかなば身を乗り出し宙を掻くもおそく、クラスメイ卜の手を放れたキーホルダーは真下の花壇におちて見えなくなった。

『飽きた飽きた、帰ろうぜ』

『マックよってこー』

『俺らの分もちやんと掃除やつとけよ。さぼったら殴るかな』

『モツプもかたしといてねー』

クラスメイ卜ががやがや騒ぎながら教室を出て行く。

窓枠を掴む手に間接が白く強張るほど力がこもる。

蹴られた体の痛み汚された制服の哀しみにも増して、キーホルダーを救えなかった無念と後悔が絞り上げるように胸を苛む。

もう少しぼくの足が速かったら、運動神経がよかったら間に合ったのに。

どうしてぼくはこんなだめなやつなんだろう。

『っ……………』

土下座までしたのにまったくのむだだった。

哀切な感情が込み上げ焼け石の如く喉を塞ぐ。

喉が息苦しく嗚咽の発作が襲い、俯けた肩が震え出す。

いい年してアニメが大好きで何が悪い。

学校にアニメキャラのキーホルダーつけてきてなにが悪い、だれにも迷惑かけてないだろ。

そう言い返せばどれだけよかったか。

現実には仕返しひとつできず、一方的にいわれっぱなしやられっぱなしで、いじめっこが立ち去った教室にぼんと取り残されている。

窓枠に突っ伏し声を殺し泣く。

無力感に打ちひしがれ、劣等感に凝り固まっていく自分を意識し始めたのはこの時だ。

掴んだ窓枠の固さ、鼻の奥がツンとする感覚。

教室にはモツプや箒やちりとりが散らかりっぱなしで、これ全部一人で片付けなきゃいけないくて、掃除も全部、ぼららの椅子とか机せんぶ元に戻さなきゃいけないって、蹴られた体はあちこち痛くって。

キーホルダーははるか下方、花壇の茂みに消えてしまった。

『ごめん……………』

助けられなかった。

夢中で駆けたのに手が届かなかった。
後悔の苦味が口の中に広がる。

ぼくは足が遅くて、クラスで一番遅くてとろくさくて、人見知りの赤面症でしゃべるのが苦手で、だからあの時も

「東ちゃん」

あの時はつきりと、自分の言葉で言い返せていたら。

「東ちゃんてば」

ぼくはもう少し自分を

「東ちゃん」

うるさい、人が感傷にひたつてるときに。

「うー……ん……？」

まとわり付く眠気を払いのけ薄目を開ける。

まことに遺憾ながら、ぼくをちゃん付けで呼ぶ図々しい人間はひとりしか心当たりがない。自慢じゃないが友達がいらないのだ。

「……なんですか、小金井さん……押入れて寝てたはず……ちゃんとお寝閉めたのこの目で確認したのに、昼に転がってくるなんて寝相悪すぎ……」

待て、襖は無事か？

就寝前、小金井が押入れに入るのを確認した。

そもそもぼくの部屋はテレビやゲーム機やテールや積ん読の漫画やラノベに占拠されて人がごろり寝る余裕がない。そういうわけで小金井には押入れに入ってもらった。

事前に確認したところさいわいにも閉所暗所恐怖症のケはないということ、居候なんだからちよつと狭いくらい我慢しろと追いたて

「だいじょうぶ、いくら俺でも人さまんちの襖蹴破るようなまねしないよ。せつかく泊めてもらったのに」

「ですよ。なーんだ、安心……」

「泊めてもらったお礼をね」

「はい？」

「借りは返さねーと」

ところで、ぼくの上に乗ってる黒い影はなんだ。

なんとなく体が重いの思っていた。重いはずだ、人が乗ってるんだから。

どっしり、どっかり、そんな擬音の重量感。状況がよくわからない。

「……………めがね、めがね」

「これ？」

「あ、どうも」

軽く会釈して眼鏡を受け取り、かける。

部屋の隅、散らかり放題の本を乱雑にのけ確保したスペースにしつけた布団を敷き就寝中のぼくの上に小金井がのっかっていた。

「……………トイレはあつちです」

「知ってる」

丁寧に指さして教えてやったのにそっけなく頷かれ肩透かしをくう。

じゃあなんでぼくの上ののっかってんだよコイツ。

居候の分際で布団で寝ようなんて贅沢な。

お前なんか押入れて十分だ、いやなら出て行け、それか廊下で寝ろ。

怒涛の如く込み上げる罵倒を封じ、おもいつきり不審な眼

差して馬乗りになった男を睨む。

小金井がぼくの上でだしぬけにごそごそやりだす。

「東ちゃん童貞でしょ？ 初めてはキツイだろうから、じつとしていいよ。まかしといて」

んじやお言葉に甘えて。

「甘えちゃいけないだろ!？」

よくわからない。

わからないが、この状況はまずい。非常にまずい予感がひしひしと。

得体の知れぬ胸騒ぎに駆られ毛布を剥ぎがばり跳ね起きようとするれば、小金井に宥めすかすような声音で制される。

「しっ」

どういうことだ、なんで起きたら小金井が上にのっかってるんだ。ちゃんと襖閉めたのに。

というか、ぼくの寝込みを襲って何を企んでる？

強盗。

恐ろしい可能性に思い至り、一気に毛穴が開いて冷や汗が噴き出す。

「……………つ……………」

自称ヒモ、本性強盗。マウントをとられるとは不覚。

携帯は……………だめだ、テーブルの端にのっかっててぎりぎり手が届きそうにない。

「こ、こ、ころ、ころころころ」

「コロ助？」

「初めてのチュウどころの騒ぎじゃないです!!」

いぎ進めやキツチン。

殺さないでと言おうとして嘸みに嘸みまくる。突っ込みだけは嘸まない自分が恨めしい。

大胆にマウントとつた小金井は舌を噛みつつ命乞いするほどを怪訝な顔で見下ろしている。

ああ、もうおしまいだ。

二十二年の短い生涯、心残りはいくさんある。

読んでない漫画、読んでないラノベ、開封してないフィギュア、作りかけのガンブラ、撮りためて見てないアニメ……固く目を瞑り、最期の頼みを口にする。

「い、痛くないでください……」

死ぬなら、せめてらくに死にたい。ぼくはマジじゃない、痛いのは大嫌いだ。

「安心してよ。自分で言うのもなんだけど、俺、上手いからさ」

「こがねいさん、ぼく以前にも経験あるんですか？」

「まあそれで食ってきたようなもんだしね」

小金井は一度ならず人殺しの前科があるプロの強盗だった。そこらへんを普通に歩いてそんなイマドキの若者のくせして侮りがたし。

「ひい……」

あつさり悪びれず殺人の前科を告白した小金井に戦慄、凶悪犯と狭く暗い部屋の中一対一至近距離で顔突き合わせた異常な状況に頭のネジが飛ぶ。

八王子東二十二歳、恥の多い生涯をおくってしまいました。

ぼくが死んだらバソコンは中身を覗かず焼却、部屋にあるラノベや漫画エロゲは棺と一緒に火葬に処して……

「!? いひつ、」

不意打ちだった。

突如として脇腹に滑り込んだ手の感触に、悶々と練り始めた遺言の文面も消し飛ぶ。

「な、いひや、なに？　そこ頸動脈じゃない、絞めるなら首」

「東ちゃん痩せてるね。ちゃんと飯食ってるの？」

思考回路が焼け付き暴走、言語中枢が麻痺して意味不明な奇声を放つ。

余計なお世話を眩きながら小金井は手を動かし、パジャマ代わりのだぶつく「シヤツ」の裾を捲り上げていく。

裾から滑り込んだ手が痩せた腹筋をまさぐり、骨ばった指が伝える体温の不快感に身がすくむ。

「あの、え？　もしもし小金井さん、つかぬことをうかがいますがあなた強盗じゃあ」

「俺はヒモ」

小金井が心外そうに眉を寄せる。

ああ、そうかヒモか……一瞬納得しかけるも、現状に立ち返ってパニツクを来たす。

「あの、ちよつと、さわらないでくださいあツ!?」

悶絶。素で舌を噛んだ。

腰にそってゆるやかに上下していた小金井の手が味をしめ、薄く貧相な胸板のあたりでじらすように円を描き始めたからだ。

結論からいうと、筆舌尽くしがたく気持ち悪い。

男の乾いた手と骨ばった固い指とが服の内側でうごめき素肌をまさぐる。

「いつ……ちよ、やめ、はなれて……」

隠微な衣擦れの音と劣情の息遣いが焦燥を煽り、自分の身にながら起きてるか理解するのに時間がかかる。

思考停止状態から復帰するも動揺激しく、小金井の肩を掴み押しのけようにも腕がふやけて力が入らない。

「ちよ、いいかげんに、そんなとこさがしたつて財布ありませんから！」

「知ってる」

「じゃあどいてください、深夜いきなり人叩き起こして目的なに」

「夜這い」

服の裾を胸まで捲り上げ、皮膚に包まれた鎖骨のふくらみに唇を這わせる。

「うあ」

敏感な鎖骨を吸われ拒む手が萎える。

動転して力が入らない体では抵抗もむなし、片手で器用にぼくのシャツをたくしあげ、露になった薄く貧相な胸板やら生白い腹筋やらに接吻をおとしながら、余った手をズボンに挟み込みするするおろしていく。

夜這い。

受け、攻め。

チャットでよく話すまりろんちゃんに汚染された知識がフィードバック。

『いやーちゃん絶対受けだよねー。実際会ったことないけどチャットで話してるだけでそう思うもん』

実際会ったことないのに断言された、あれは予言だったのか。

「待て待て待て待て待て、予言とかありえないし!？」

初めて部屋に泊めた男に夜這いされるとかありえないぼく男だし男が男を夜這いしてなにが楽しい犯罪だし

「たんまたんま小金井さんっ、ぼくいまだに状況よくわかんないんですけどいくらヒモだからって男相手に余計な氣遣わなくていいしそれむしろ迷惑だから!! いやぼくだって相手が美少女な夢魔なら騎乗位大歓迎だけど小金井さん

生身で男だし、そのテーブルでキュアレモネードとザクが見てるし、夜這いがお礼って発想自体正直どうかなおもいますよ人として!？」

「怖くない怖くない」

「剥いて剥いてまたしまう、じゃなくてあなたカモつた女の子にもおなじことしてんですか!？」

「相手がいやがったらしい。中出しとむりじいはしない主義なんだ」

「今後者してるから、現行犯だから!」

小金井は話を聞かず、性感を与える官能的にこなれた手付きで愛撫に励み、ぼくのズボンを下着ごと引きずりおろす。今のぼくの状況を四字熟語で表すなら汗牛充棟四面楚歌、へたに動けば手足が布団のまわりに積んだ本や漫画にぶつかってなだれをおこし圧死か窒息死の悲惨な運命が待ち受ける。

ぼくがおいそれと身動きできぬ状況に陥った原因はといえれば自らの計画性のない散らかし方と見知らぬ男に押しきられ部屋に上げてしまった主体性のなきで、迂闊に鍵かけ忘れ凶悪犯を迎え入れちゃった手前、強盗致死の結末を迎えようが自爆の範囲内で同情の余地なしな気がすこくする。「妙な気遣わなくていいですから大人しく押入れて寝てください!」

「だつてせつかく泊めてくれたのに何もなしなんて悪いじゃん。そのへん律儀なんだ、俺って」

「俺語りはいいから手はなしてください!」

「暴れると床が抜けるよ」

洒落にならん、ほんと。

リアルな脅迫に硬直し、ズボンを引っ張る手がとまる。

小金井を追い払わんと峻険な漫画とラノベの断崖に蹴りくればよいものなら連鎖で大崩壊を招く。雪崩れの重量で床が抜けでもしたら階下の住民にご迷惑がかかる、へたすりゃ巻き添えで圧死。ぼく一人ならまだしもぐつすり熟睡中の無関係なご近所さんを巻き込むのはいかなるものか。

八王子東二十二歳、オタクニートひきこもりでも人の道はずれちやいけない。

剥き出しの下肢を隠そうと膝を閉じるも、小金井は委細構わず、舌なめずりしかねぬ顔でぼくの股間をのぞきこむ。

「いあ、や」

貞操の危機。電気の消えた部屋の中で蒼ざめる。

萎縮した内腿にひたり手が触れる。

そもそもぼくは真性のオタクで結構深刻な対人恐怖症で潔癖症のきらいもあるからにして三次元との接触は生理的レベルで受け付けけないのだ。

ぼくが受け入れられる三次元はフィギュアかどっこいぎりぎり

食玩に限定されていて、男である以前に生身でリアルの間の人肌と接触したら体が拒絶反応を起こす。ほら見て全身にもものすごい勢いで鳥肌が分布。

刷毛でも使うみたいに内腿をなでられるくすぐったさを気持ち悪さが上回り毛穴が縮む。

「東ちゃん童貞ってホント？ 〔反応新鮮〕」

緩慢な前後運動に合わせ茶髪がむずがゆく鼻をくすぐる。

今ぼくの上のつかつてるのは夢魔の美少女。

そしてこれは騎乗位だ。

強烈な自己暗示をかけ騎乗位サイコーと現実の改竄を試みるも妄想でも克服できぬおぞましい感触に心が折れる。

いやだこんな声低くて手がゴツイ美少女。

恥ずかしい情けないぐずぐず渋つてる場合じゃない、警察に助けをもとめるのは抵抗あつたけどよく知りもしないただ一日泊めただけの男に強姦されるよりはるかにましだ。

テーブルの端のつかつた携帯を掴もうと手をばたつかせるも届かず、悪戦苦闘試行錯誤してどうにかおまわりさんに助けを求めようとあがくあいだにも、小金井はすっかりその気で準備万端、内腿に這わせた手に力をいれる。

小金井がぼくの貧弱な足を割り開き、性欲と嗜虐が結び付

くサデイステイックな笑みを浮かべ、いざー

「体で返すくらいならドラクエの経験値上げ手伝つてください!!」

「……………ドラクエ？ ゲームの？」

相変わらずぼくの足を掴み、局部をさらした恥ずかしい体勢をとらせたまま、小金井があっけにとられ眩く。

咄嗟に思い付いた妥協案にして譲歩案、小金井の暴走を阻止せんがための心からの叫び。

「そ、そのドラクエです。経験値稼ぎ手伝つてくれるなら、非常に有り難いんですけど」

ぎこちなく愛想笑いし、たどたどしく言う。

「ドラクエの経験値手伝うから無期限ここにいていい？」
「好きなだけいてくれていいですから今すぐ上からおおりてズボンはかせてください!!」

今日会ったばかりの素性も得体も知れぬ男に、体毛が薄く貧弱な下肢と子供みたいな性器をまじまじ視姦される恥辱と嫌悪に耐え切れず、もうどうにでもなれとやけっぱちで叫ぶ。

しかし小金井はここまで言っても上からおりず、その一瞬ふいに真顔になり、底光りする目で念押しするように射すくめる。

「今のセリフ忘れんなよ？」

その夜、ぼくは小金井と名乗る悪魔と取引した。
八王子の受難の始まりだった。

(以下続)